湾岸アラビア諸国における人口構造とその変化

福田安志

I　はじめに
II　アラビア半島の歴史上の人口
III　二つの社会類型
IV　経済発展と人口構造
V　首都人口の増加と首都への人口移動
VI　むすびにかえて

I　はじめに

湾岸アラビア諸国では，石油開発にともなう経済的発展のなかで社会的変容が始まり，それはオイル・ショックのあった1973年以降加速された。

湾岸アラビア諸国の社会を変えた主な要因は，石油収入に基づく経済的発展とインフラの整備，そして水資源開発の進展であった。経済的発展のなかで，それまでの農業や牧畜業に依存した，あるいは一部の都市では小規模な商業や運輸業に依存した，人々の経済生活は大きく変わり，道路や通信網の建設あるいは学校や病院などの建設・整備を通し，人々の社会生活や意識なども変わっていった。さらに，水資源の開発は都市の成長を可能にし，また農業の姿も大きく変えることとなった。都市でも農村でも道路や住宅の建設が進み都市部では新興住宅地が急速に広がっていった。こうして，人々の職業，日々の生活、人間関係の在り方，そして意識は大きく変わり，人口が急速に増加し，部族や家族などの社会的集団の姿も変わっていった。

こうした変化の具体像は国によって，そして地域によってそれぞれに異なっているが，本稿では人口とその変化に焦点を当てて検討する。急激で大きな社会変容を背景に，湾岸アラビア諸国では，経済や政治の側面でも様々な変化があらわれている。こうした湾岸アラビア諸国について研究する際には，基礎的な指標である人口の実態とその変動について正確な数値を把握しておくことが重要な意味を持っていることは言うまでもないことである。

しかし，湾岸アラビア地域では近年人口統計の整備が進んでいるとはいえ，これまでの人口の実態とその変動については不明な点が多く，各国の社会・経済・政治の変化について統計的に分析することを困難にしている。湾岸アラビア地域の多くの国では，そもそも正式かつ正確な人口調査が実施されておらず，現在各国政府が公表している人口に関する統

計数字についても，オマーンなどを除いては，実数を正確に示していないとして疑問視する見方も存在しているほどである。

本稿では，湾岸アラビア諸国における人口の実態を明らかにする基礎的作業の一環として，主に近代以降の各国の人口数とその変化について，また人口の地域的分布状態と自国民・外国人などの構成要素などに着目し人口構造の変化について検討する。この作業を通して，近代から現代にかけての各国の人口の実態についても見通しをつけ，また多数の外国人労働者の存在の影に隠れて見えづらくなっている，石油開発期以降の都市化と現地人の人口移動についてもできるだけ明らかにしていきたい。

なお，本稿では人口数について国ごとに取り扱ったが，その際の各国の領土は，例え歴史上のものであっても，現在の国境線に基づくものとした。各国とも，その領土は近代から現代にかけて大きく変化し，領土の変化に応じ人口数も変わったが，本稿では現代の人口と比較し社会変容について検討する都合上からも，現在の国境線を歴史上の国家にも当てはめ，その領域に当時どれくらいの人口があったかについて検討した。

II　アラビア半島の歴史上の人口

石油開発が始まる前の湾岸アラビア諸国の人口はどれくらいであったろうか。

工業などの近代的産業が存在しなかったアラビア半島地域では，石油開発が始まる前は，人々は農業や牧畜業に依存して生活することが多かった。農業や牧畜業以外には商業，通商活動，手工業，運輸業なども行なわれていたが，商業をはじめとしたそれらの産業は比較的規模が小さく，多数の人口を養えるだけの力はなかった。オマーンなどのように漁業が行なわれていた地域もあったが，地域の総人口から見れば漁業で生活していた人々の数はわずかであった。ペルシャ湾では真珠採取も行なわれていたが，真珠採取は5月頃から9月頃までの限られた期間に行なわれ，また採取された真珠は加工されることなく輸出された。さらに働き手についても，ベドウィンが一時的に雇用され働き手の一部となったことがあったように，真珠採取が盛んであったとはいえ真珠採取にかかわっていた定住民の人口はあまり多くはなかった。

したがって，石油以前のアラビア半島で人口が多かった地域は，農業や牧畜業が比較的盛んであった地域であり，それは自然降雨や地下水など，農業や牧畜業に必要な水資源が比較的豊かな地域であった。

人口が多かった地域としては，まず季節風の影響で降雨が多く農業も盛んであったイエメン山岳地域を挙げなければならない。史料が少ないこともあり近代におけるイエメンの人口はわかっていないが，現代にかけてのさまざまな情報を考慮して，イエメン(現在のイエメン国の領域を対象とする)の人口は19世紀には200～300万人程度あったものと推定しても，実際の人口から大きく外れることはないであろう。

イエメン山岳地域の次に人口が多かった地域はオマーンのオマーン山脈周辺地域であり，そこでは山地に比較的降雨があるため地下水の量が多く，山脈周辺地域と山間部には人口が多かった。その他に人口の多かった地域と

第1表　パルグレーヴが記したサウード朝の人口（1862／63年頃）

地　方	町または村の数	人口(人)
'Aareḍ	15	110,000
Yemāmah	32	140,000
Ḥareeḳ	16	45,000
Aflāj	12	14,000
Wadi Dowāsir	50	100,000
Seley 'yel	14	30,000
Woshem	20	80,000
Sedeyr	25	140,000
Ḳaseem	60	300,000
Ḥaṣa	50	160,000
Ḳateef	22	100,000
小　計	316	1,219,000
遊牧民の数		76,500
合　計		1,295,500

（出所）　Palgrave, W.G., *Personal Narrative of a Year's Journey through Central and Eastern Arabia.*

第2表　パルグレーヴが記したラシード家統治下の人口（1862／63年頃）

地　方	町または村の数	人口(人)
Djebel Shomer	40	162,000
Djowf	12	40,000
Kheybar	8	25,000
Upper Ḳaseem	20	35,000
Teyma'	6	12,000
小　計	86	274,000
遊牧民の数		166,000
合　計		440,000

（出所）　第1表に同じ。

しては，アシール地方やジーザーン地方などイエメン山岳地域と地続きの地域が挙げられよう。

その他のアラビア半島地域は全般的に人口が希薄であったが，そうした中でも比較的人口の多かった地域としては，ワーディが存在し比較的地下水が多かったナジュド地方や，メッカとメディナの2聖地のあったヒジャーズ地方を挙げることができよう。

また，ペルシャ湾岸に面した地域も人口が希薄な地域であったが，その地域の中では，ハサー地方やカティーフ地方からバハレーン島にかけての地域が比較的人口が多かった。ハサー地方からバハレーン島にかけての地域は，やはり地下水の量が比較的多くオアシス農村が広がり農村部を中心にして人口が多かった。

近代における湾岸アラビア地域では，各地域の人口は具体的にはどれくらいであったろうか。史料に記載されている数値から見ていこう。

近代のサウジアラビアの人口については，1862年から63年にかけてアラビア半島を旅行した，ユダヤ人を祖先とするイギリス人旅行家パルグレーヴの旅行記が手がかりを与えてくれる。パルグレーヴは，当時のサウード朝の人口を各地方ごとに記し（第1表），サウード朝全体では，129万5500人の人口があったと推定している(注1)。パルグレーヴは，この数字の根拠としてリヤードのサウード朝政府の帳簿と，彼自身が各地で集めた情報に基づいていると記している。さらに，パルグレーヴは，ハーイルを中心としたラシード家の統治下に実質的に置かれていた地域には，定住民と遊牧民合わせて44万人の人口があったと推定している（第2表）。

たしかに，当時のサウード朝政府は各地でザカートを徴収しており，ザカートの徴収などを通し各地の人口をある程度把握していたものと考えられる。また，パルグレーヴ自身

も，現在のヨルダン方面からアラビアに入り，ハーイルなどラシード家の統治下の地域を通り，ナジュドを縦断しリヤードに至り，そしてホフーフ，カティーフを通ってペルシャ湾に出ている。このため，パルグレーヴが示した各地の人口数は，正確なものであるとは必ずしもいえないかもしれないが，当時の人口の実数と人口分布の状態をある程度反映した数字になっていると考えてよいであろう。

パルグレーヴは，前述のようにサウード朝の統治下の地域には129万5500人がおり，ラシード家の統治下の地域には44万0000人がいるとしており，両地域合わせて173万5500人の人口があったと推定している。パルグレーヴが示した各地の人口について，後の時代の人口に関する資料と比較検討すると，パルグレーヴが示した数字の中には実数よりも多く見積もっているのではないかと思われるものも見られる。また，遊牧民については，サウード朝政府などもその実数を正確にはつかんでいなかったかもしれない。こうした点を考慮し，パルグレーヴが示した数字に後の時代の人口に関する情報も加え検討し，当時のサウード朝とラシード家の統治下にあった地域の人口をあらためて算出すると，当時の人口は130～160万人程度ではなかったかと推定される。

パルグレーヴが記した当時のサウジアラビアの人口には，サウード朝の支配がおよんでいなかったヒジャーズ地方と，アシール地方やジーザーン地方などイエメンと国境を接した地域などが含まれていない。パルグレーヴが記した数字に，当時人口が多かったアシール地方やジーザーン地方などと，メッカ，メディナの2聖地があるヒジャーズ地方などを加えて，現在のサウジアラビアの領域についての当時の人口を推定すれば，サウジアラビア全体では200万人から240万人程度の人口があったのではないかと考えられる。

クウェートの人口については，古いところでは，デンマークの探検隊の一員として1762年から65年にかけてアラビアを訪れた，ドイツ系の測量技師ニーブールの旅行記に記載が見られる。ニーブールは，クウェートの町の人口は一般的には1万人であると推定されているとし，さらに，暑い季節には多くの住民がバハレーンに移動しまたダマスカスやアレッポにキャラバンで行くものもおり，暑い季節には人口が減少し3000人以下になると推定されていると述べている(注2)。ニーブールの旅行記の中では，ペルシャ湾岸についての記述の多くは伝聞や他の旅行記などから得た情報に基づいており，何人かの研究者がその記載内容に疑問な点があるとしているが，クウェートの町の人口を1万人であると推定したその数字についても若干誇張があると考えられている。当時の，クウェートの町の実際の人口は6千人から8千人程度というのが妥当なところであろうか。

ペルシャ湾岸地域の詳しい人口がわかるようになるのは，今世紀に入ってからのことである。とくに，湾岸のアラビア半島側の地域の人口に関しては，当時その地域で支配的立場を確立しつつあったイギリスの史料が多くの情報を与えてくれる。なかでも，1908年にイギリスのインド政庁が取りまとめたペルシャ湾岸地域についての地誌は各地の人口についても詳しく記しており，しかも当時のイギリスの情報収集力から考えて，サウジアラビアを除いた各地域については，多くの場合，

ある程度実態を反映した数字であると考えられる。

その地誌によれば，サウジアラビアを除いた各地域の1908年頃の人口は，クウェートでは約5万0000人(うち定住民が約3万7000人，遊牧民が約1万3000人)，バハレーンは約10万0000人(注3)，カタルは約2万7000人であるとされ，また当時トルーシャル地方と呼ばれたアラブ首長国連邦の地域には約8万0000人の人口があり，オマーンは48万6360人の人口があったとされている(注4)。なお，トルーシャル地方を構成した当時の各首長国の人口については，第3表に示した。

地誌に記された当時の各地域については，例えばオマーンにドファール地方が含まれていないなど，現在の領域と若干の相違も見られるが，その点を考慮すれば，上記の数字より当時の各地域の人口の実態をある程度把握することができよう。

前述の数字に基づき，経済や社会あるいは領土の変化を考慮して，イギリス支配の影響があらわれる前の19世紀半ばの各国の人口について推定し，第4表に示した。なお，算出の前提とした各国の領域については，現在の人口と比較する必要から，当時の国家領域ではなく，現在の国家の領域に基づき，そこに当時どれくらいの人間が住んでいたかについて推定した。この第4表に示したのは各国の19世紀半ばの推定人口であるが，各国の人口は18～19世紀を通し，国によって若干の増減はあろうが，ほぼ同程度の人口数で推移していたと見てよいであろう。

第3表　トルーシャル地方の首長国ごとの人口（1908年頃）

首長国	人口(人)
アジュマーン	750
アブダビ	11,000
ドバイ	10,250
ウンム・アルカイワイン	5,000
シャルジャ	45,000
遊牧民	8,000
合　計	80,000

＊　シャルジャには現在のラアスル・ハイマなどが含まれている。
(出所)　第1表に同じ。

第4表　各国の19世紀半ばの人口（推定）

国　名	人　口
サウジアラビア	200～240万人
オマーン	50～ 60万人
アラブ首長国連邦	6～ 8万人
バハレーン	5～ 8万人
クウェート	2～ 3万人
カタル	1～ 2万人

＊　当時の国境ではなく現在の国境線に基づき推定。
(出所)　筆者作成。

参考までに，他の地域の当時の人口を示すと，例えば19世紀半ばのエジプトの人口については，ジョン・ボーリングは1840年にイギリス議会に提出した報告書の中で様々な数字を検討したのちエジプトの人口は200～250万人であると推定している(注5)。また，中岡三益氏は，19世紀初頭のシリア地方の人口は150～200万人であり，同じ時期のイラクの人口は100～120万人であったと推定している(注6)。ヨーロッパ諸国でも，例えば産業革命以前のイングランドとウェールズを合わせた人口は約600万人であると推定されているが，そうした事例と比べれば，湾岸アラビア諸国の人口は，サウジアラビアやオマーンについては当時としては極端に少なかったわけではないことが理解されよう。

なお，石油開発が始まった頃の各国の人口については，第二次世界大戦が終わった年で

もある1945年について，当時の統計的資料や，あるいは各国における経済および社会の変化を考慮して推定し，その概数を第5表に示した(注7)。

III　二つの社会類型

第4表や第5表にも示されているように，近代における湾岸アラビア諸国は人口の側面から見て，二つのグループに分けることができる。一つのグループは人口の多いサウジアラビアとオマーンであり，もう一つは人口がきわめて少ないクウェートやカタルなどの首長制国家である。こうした二つのグループの存在は政治的，経済的体制の相違を反映しているが，ここでは人口の側面に焦点を絞って検討する(注8)。

クウェートやカタルなどの首長制国家では，クウェート市やドーハ市など，それぞれの国の首都に人口の多くが集まり，首都は人口構造の上で中心的な役割を果たしてきた。例えば，1908年頃のクウェートの人口構造について見てみると，約5万人の人口のうち，クウェート市に住んでいたのは約3万5000人で，その他の村落地域の住民が約2000人となっている。遊牧民の数は約1万3000人であった。遊牧民を除けば，ほとんどの人口は首都であったクウェート市に住んでいた。

カタルの場合は，1908年頃のカタルの人口2万7000人のうちドーハの人口は1万2000人を占めていた。トルーシャル地方(アラブ首長国連邦)については，アブダビ首長国を例にとると，アブダビ首長国の人口1万1000人に対しアブダビの町の人口は6000人であった(注9)。

第5表　1945年の各国の推定人口（外国人を含む）

国　　名	人　口
サウジアラビア	230～300万人
オマーン	50～ 60万人
アラブ首長国連邦	10万人
バハレーン	9.5万人
クウェート	8万人
カタル	3万人

＊　当時の国境ではなく現在の国境線に基づき推定。
（出所）　筆者作成。

このように首長制国家では，首都あるいは中心となる都市に人口の多くが集まっていた。

もっとも，人口が少なかった首長国のグループの中でもバハレーンだけは例外的存在で，そこでは多数の農村が存在し農村の人口も多かった。前述のイギリスのインド政庁が作成した地誌によれば，1908年頃のバハレーンの総人口約10万人のうち，四つの町に住んでいた住民の数は合わせて6万0800人で，バハレーン島などを中心に104カ村あった村落地域の居住者が3万8275人おり，その他にマナーマには約200人の非イスラーム教徒が住み，また遊牧民も若干ではあったが存在していたとされる(注10)。なお，農村の住民の大部分はシーア派であった。バハレーンは地下水が比較的豊富であり農村が多かったことが，都市中心の他の首長制国家とは異なる人口構造を作り出したのであった。

人口構造の面でクウェートなどの首長制国家のグループと対照的な構造を示しているのがサウジアラビアとオマーンであり，そこでは総人口が多く，しかも首都以外の地域に居住した住民の割合がきわめて高くなっている。

サウジアラビアの人口構造について見てみると，首都リヤードの人口は，1908年頃には

たった約8000人にすぎなかった(注11)。サウジアラビアでは1902年にリヤードを首都として第3次サウード朝が始まり，アブド・アルアジーズの統治の下でその領土を拡大していったが，時代が下ってメッカ，メディナのあるヒジャーズ地方，ラシード家の支配地域，アシール地方などをその版図に加えるようになっても，リヤードの人口はあまり増加しなかった。1938年の記録によれば，その当時でもリヤードの人口は約1万8000人にすぎず，1908年頃の人口と比較して人口数は増えてはいるものの，その絶対数はわずかで，250万人前後と推定される当時の総人口と比較して，その1％にも満たない(注12)。リヤードの人口が増加し，リヤードが大都市に成長するのは，石油開発が進み石油経済の時代になってからのことである。

オマーンについてはどうであろうか。1908年頃のオマーンの総人口は50～60万人であったが，首都マスカトの人口は約1万0000人で，現在ではマスカト首都圏に包摂されているマトラフの人口約1万4000人を加えても約2万4000人にすぎず，サウジアラビアと同様に首都は総人口のわずかな部分を占めているにすぎない(注13)。

IV　経済発展と人口構造

湾岸アラビア諸国では第二次世界大戦後に石油開発が進展し，社会と経済は大きく変容した。そうした中で，首長制国家とサウジアラビアなどの二つのグループがそれぞれに持っていた傾向は，石油経済の時代になっても続いていた。人口構造の面では全般的に都市化が進行したが，サウジアラビアやオマーンでは依然として多くの地方部人口を抱え，一方，首長制諸国では首都中心の構造がいっそう強まっていた。

クウェートでは，石油開発の進展とともにクウェート市が発展し，その人口も増加していった。クウェートの人口は，1994年末の推定で約183万人と見積もられている。いわゆるクウェート市は，行政区域の上ではいくつかの地域に分かれており，行政区域としてのクウェート市の人口はさほど多くはないものの，ハワッリー地区，アハマディ地区やジャフラ地区などもクウェート市に含めて考えれば，クウェートの総人口約183万人のほとんどはクウェート市の人口であるとみなしてよいであろう。

また，第6表はアラブ首長国連邦における都市部居住者の数とその割合を示したものであるが，この表からもアラブ首長国連邦を構成する主要な首長国では，アブダビ市やドバイ市の例に示されているように，中心的都市に住む住民の割合が高くなっていることが見て取れよう(注14)。アラブ首長国連邦全体では，人口の約81％が都市部に居住している。首長制国家における人口の首都ないしは中心的都市への集中は，石油経済時代の経済的発展の中でいっそう進んだ。アラブ首長国連邦のケースでは，石油経済の恩恵を受けることが比較的少なかったラアスル・ハイマやフジャイラで，人口の都市部への集中があまり進んでいないことがそれを示唆していよう。

農村部地域の人口が比較的多かったバハレーンでも，経済や社会が発展する中で首都が拡大し，現在ではマナーマ以外の都市やマナーマ近郊の農村も，地理的にはマナーマ首都

第6表　アラブ首長国連邦の都市部居住者（15歳以上）数とその割合（1985年）

首長国名	15歳以上の人口（人）	うち都市部居住者数（人）	都市部居住者の割合
アブダビ	394,554	294,841	74.7%
ドバイ	267,991	254,535	95.0%
シャルジャ	149,697	125,266	83.7%
アジュマーン	32,483	29,211	89.9%
ウンムル・カイワイン	12,135	9,266	76.4%
ラアスル・ハイマ	57,917	34,048	58.8%
フジャイラ	23,851	10,923	45.8%
アラブ首長国連邦全体	938,628	758,090	80.8%

（出所）　UAE, *Annual Statistical Abstract*, 1992.

圏に包摂されるようになっている。もっとも，農村部は，地理的には首都圏に包摂されたといっても，その旧来の社会的組織や慣習などを，都市化の影響を受けつつも，いまだにある程度保持しているものと考えられる。このため，バハレーンでも数字の上では首都を中心にした人口構造になったとはいえ，他の首長制国家と同様な都市社会が形成されたわけではないことに留意しておく必要があろう。

サウジアラビアとオマーンでは，石油経済の時代になっても，首都以外の地域に人口の多くが住む構造が続いていた。サウジアラビアとオマーンの地域別人口を示した第7表，第8表，第9表からも，そのことは見て取れよう。

1974年当時のサウジアラビアの総人口は約694万人であるが，首都リヤードの人口は約67万人で，首都機能の一部を代行していたジェッダの人口56万人を加えても123万人にしかならず，両市の人口を合わせても総人口の17.7%を占めるにすぎない。しかも，リヤードやジェッダには多数の外国人が居住していたことを考慮すれば，サウジアラビア国民の人口構造の中で，リヤードとジェッダの占める割合はさらに低下しよう。たしかに，リヤードの人口は1962／63年の約20万人から74年には約67万人と急増しているが，人口の大部分はまだ首都以外の地域に分散している。

オマーンについても，サウジアラビアと同様な人口構造が続いていたことが，オマーンの地域別人口分布を示した第9表から見て取れよう。1993年のセンサスに基づけば，外国人を除いたオマーン国民については，マスカト

第7表　サウジアラビアの地方別人口（1974年）

行政区域	人口（人）	総人口に占める割合
リヤード	1,272,275	18.3%
メッカ	1,754,108	25.3%
東部州	769,648	11.1%
アシール	681,361	9.8%
メディナ	519,294	7.5%
ジーザーン	403,106	5.8%
カシーム	316,640	4.6%
ハーイル	259,929	3.7%
タブーク	193,763	2.8%
バーハ	185,905	2.8%
ナジュラーン	147,970	2.1%
北部国境地域	128,745	1.9%
ジャウフ	65,494	0.9%
クライヤート	31,404	0.5%
国境地域の遊牧民	210,000	3.0%
小　計	6,939,642	100　%
海外居住者	73,000	
合　計	7,012,642	

（出所）　R.El Mallakh, *Saudi Arabia* より作成(注15)。

地域にはその内の22%しか住んでいない。しかも，第9表でマスカト地域とされている地域はマスカト首都圏のことで，マスカト近くの農村地域も含んでおり，こうした農村地域の人口を除外すれば，マスカト市の純人口とその総人口に占める割合はもうすこし少なくなる。オマーンでも，1990年代になっても人口の多くはマスカト以外の地方部に住んでいることが見て取れよう。

第8表　サウジアラビアの主要都市とその人口

都　市　名	人口（人）1962～63年	人口（人）1974年
リヤード	197,800	666,840
ジェッダ	147,811	561,104
メッカ	158,641	366,801
ターイフ	53,954	204,857
メディナ	71,998	198,186
ダンマーム	n.a.	127,844
ホフーフ	50,000	101,271
タブーク	n.a.	74,825
ブライダ	n.a.	69,940
ムバッラズ	n.a.	54,325
小　計		2,425,993
ハミース・ムシャイト	n.a.	49,581
ホバール	n.a.	48,817
ナジュラーン	n.a.	47,501
ハーイル	n.a.	40,502
ジーザーン	n.a.	32,812
アブハー	n.a.	30,150
合　計		2,675,356

（出所）　A.J. Cottrell, *The Persian Gulf States* より作成(注16)。

V　首都人口の増加と首都への人口移動
——サウジアラビアとオマーン——

サウジアラビアやオマーンでは地方居住者の割合が大きかったとはいえ，石油開発が進み経済的に発展する中で，首都の人口も飛躍的に増加していった。それは，数字の上でも裏付けられる。

サウジアラビアでは，1908年に8000人，38年には1万8000人とわずかだった首都リヤードの人口は，第二次世界大戦後に石油開発が本格化するとしだいに増加し，第10表に示したように，1960年代，70年代，80年代とその人口は大幅に増加していった。増加のペースは，オイル・ブームの時期であった1970年代半ばから80年代半ばにかけていっそう強まり，91年には200万人を超えるまでになっている。そして，リヤードの人口は現在も増加を続けている。1974年に総人口の9.5%を占めていたリヤードの人口は，91年には総人口の約12%を占めるまでになり，首都はサウジアラビア

第9表　オマーンの地域別人口分布（1993年）

地域名	地域ごとの人口（人，含外国人）	総人口に占める割合	外国人数（万人）	自国民の比率	自国民数（万人）	自国民総人口に占める割合
マスカト	622,506	30.9%	29.3	53%	33.0	22.2%
バーティナ	538,763	26.7%	8.1	85%	45.8	30.9%
ザーヒラ	169,710	8.4%	3.9	77%	13.1	8.9%
ダーヒリーヤ	220,403	10.9%	2.6	88%	19.4	13.1%
シャルキーヤ	247,551	12.3%	3.5	86%	21.3	14.4%
ドファール	174,888	8.7%	5.4	69%	12.1	8.2%
ムサンダム	27,669	1.4%	0.6	80%	2.2	1.5%
ワスタ	16,101	0.7%	0.3	82%	1.3	0.9%
合　計	2,017,591	100　%	53.8	74%	148.0	100　%

（出所）　1993年のセンサスより作成。

第10表　リヤード市の人口とその変遷

（単位：人）

年	1908	1938	1962/63	1974	1981	1987	1991
リヤード市	8,000	18,000	197,800	666,840	100万	150万	2,083,352

（出所）　A.J.Cottrell, J.G.Lorimer, およびサウジアラビア政府資料(注17)。

第11表　マスカトの人口とその変遷

（単位：人）

年	1908	1970	1980	1989	1993
マスカト	24,000	3～4万	16万	444,472	622,506

（注）　1908, 1970年はマスカトとマトラフの人口，1980, 1989, 1993年はマスカト首都圏の人口。
（出所）　J.G.Lorimer, およびオマーン政府統計資料など(注18)。

の人口構造の上でその比重を増していった。

オマーンでは，マスカトに隣接した港町マトラフを含めても，1908年にわずか2万4000人前後にすぎなかったマスカトの人口は，70年になってもまだ3～4万人程度であった(第11表)。オマーンでは1967年から石油生産が始まり，70年代に石油開発が本格化したが，石油開発の本格化にともない経済開発が進展すると，マスカトの人口は急速に増加した。マスカト市を含む首都圏の人口は，1980年に約16万人になり，そして89年には44万4472人へと急増し，さらに93年には62万2506人になりその人口は増加を続けた。1993年に行なわれたセンサスに基づけば，オマーンの総人口は約202万人であったが，マスカト首都圏の人口は総人口の約22%を占めるまでになっている。

しかし，こうしたリヤードやマスカトの発展にもかかわらず，地方からリヤードやマスカトなどの首都への人口の移動は，思ったほどには進んでいない。

サウジアラビア政府の統計によれば，1986年の段階でリヤード市に居住していたサウジ人戸主約11万人のうち，4万4000人の戸主は25年以上リヤードに居住していたとされる。残りの6万6000人の戸主については，彼らは25年の間に地方からリヤードへ移住してきた者たちであり，その割合は戸主全体の60%となる。この割合を見るかぎりでは，リヤードへ移住したサウジ人の数は多かったように見えるが，実際にどれくらいの数のサウジ人が地方からリヤード市へ移住したのであろうか。

リヤード市について，外国人を除いたサウジ人の人口だけに限って見てみると，1970年に約30万人だったリヤード市のサウジ人の人口は，91年には約133万人に増加している(第12表)。この間に増加したサウジ人の数を差し引きで計算すると，1970年以来の21年間で100万人程度である。1970年の段階でリヤードには，すでに約30万人のサウジ人が住んでおり，このもともと住んでいたサウジ人の人口も子供の出生により自然に増加している。また，外部からリヤードに移住してきた新参の住民自体についても，当然のことであるが人口の自然増があった。一方で，その数はあまり多くはないものと思われるが，リヤード市から他の都市へ移住していったサウジ人もいた。

第12表　リヤード市の人口構成（1991年）

	人口（人）	うち男性(人)	うち女性(人)
サウジ人	1,331,092	709,022	622,070
外国人	752,260	436,053	316,207
サウジ人の比率	63.9%	61.9%	66.3%
合　計	2,083,352	1,145,075	938,277

（出所）　サウジアラビア政府資料。

これらの数を，加減して計算すれば，リヤードの外からリヤード市へ流入したサウジ人の実数は21年間で60万人前後ではなかったかと推定される。リヤード市の人口が急速に増加していったのに比べ，地方からリヤードに流入したサウジ人の数は意外に少なかったことが理解されよう。このことは，逆に地方の視点で見れば，地方からリヤードへ出ていったサウジ人の数があまり多くなかったことも示している。

オマーンのマスカトの場合は，1970年から93年までの23年間にオマーン人の数は約30万人増加しているが，マスカトにもともと住んでいたオマーン人人口の自然増や移住者の自然増に加え，行政区域としてのマスカトの拡大にともない周辺地域の住民が包摂されたことなどを考慮すれば，1970年から93年までの間にマスカトの外からマスカトに流入したオマーン人の実数は，16～17万人前後ではなかったかと推定される。

このように，リヤードもマスカトも石油経済の時代になって，その人口が急増していったが，サウジ人やオマーン人などの自国民に関しては，地方から首都への人口の移動は，社会の変化が激しかった割りには，あまり多くなかったことが理解されよう。

リヤードやマスカトなどの首都の人口を急増させたのは，前述のように外部からの自国民の流入や自国民人口の自然増などがあるが，もう一つの大きい要因としては，大量の外国人の流入をあげなければならないであろう。現地人の移動がさほど多くなかった半面，かなりの数の外国人が首都に流入し，首都人口を急激に膨張させたのであった。

サウジアラビア政府の資料によれば，1988年頃のリヤードの人口は150万人を超えていたが，そのうち外国人が約35%，数にして約53万人を占めていた。1991年には，外国人の数は約75万人で，その割合は約36%に増えている（第12表）。また，オマーン政府のセンサスによれば，マスカト首都圏では，1993年には，その人口62万人のうち外国人の数は約29万人で，外国人の割合は約47%を占めている（第13表）。

第13表　マスカト首都圏の人口構成（1993年）

人　　口	外国人数	自国民の比率	自国民数
622,506	29.3万	53%	33.0万

（出所）　1993年のセンサスより作成。

サウジアラビアやオマーンでも，本来，人口の増加率は都市部よりも農村部の方が高く，一方で石油経済の下で雇用機会は農村部よりも都市部，とりわけ首都などの大都市の方が多い。したがって，高率での人口の増加が続いていたサウジアラビアやオマーンでは，農村などのある地方から首都へ人口が移動するのが自然であると思われる。たしかに，地方から首都などへの人口の移動は見られたが，中東の他の地域や東南アジア諸国で見られる首都への人口の移動と比べると，サウジアラビアやオマーンでの人口の移動は小規模なものにとどまっている。

サウジアラビアやオマーンで，地方から首都への人口の移動が少なかったことには，どのような背景があるのだろうか。

そのことに対する答の一つは，例えば東南アジア諸国の首都と，リヤードやマスカトを見比べれば気が付くことであるが，東南アジア諸国で存在するスラムやスラム的な低所得者の居住地域は，一部の外国人建設労働者の

住む飯場などは別にして，リヤードにもマスカトにも存在しないことから見いだすことができよう。リヤードにもマスカトにも，スラムなどは存在せず，東南アジア諸国と湾岸アラビア諸国では，移住の実態に大きな差があることが理解されよう。実際，体面を重視するサウジ人やオマーン人は，現在のところ，スラムに住んでまでして首都に移住しようとはしない。

首都への移住者は首都で普通の生活を送るのが一般的であるが，このため，サウジ人やオマーン人で，首都へ移住しようとする者は，首都での高い生活のコストを覚悟しなければならない。食料や日用雑貨などの物価水準は先進国並みかそれに近い水準にあり，住宅費も高い。バスや電車などの公共の交通機関がほとんどないので，リヤードやマスカトで生活するためには自家用車は必需品である。このため，収入の確保，つまり雇用先の確保なくしてはリヤードやマスカトへ移住することは困難である。1993年頃に行なわれたリヤードでの，サウジ人世帯主の意識調査では，仕事が無いことが最大の問題であると回答したのは，移住者で4.5%で，25年以上リヤードに住んでいる者の8.8%より少なく，このことからも実際に移住者の間に失業者が少ないことが見て取れよう。

また，仕事にしても，商店の販売員やレストランの従業員など，比較的簡単に就業できる職種は，すでに外国人労働者の手に握られているし，建設労働者など日雇的な仕事にサウジ人やオマーン人が就くとは，現状では，考えがたい。このように，多数の外国人労働力の存在も，サウジ人やオマーン人が地方から首都へ移動することを阻む大きな要因となっている。また，人口を押し出す側である地方の方でも，例えば部族社会の人間関係など，首都などへの人口の流出にブレーキをかける要因が存在している。

東南アジア諸国などでは，農村部で仕事にあぶれた過剰人口が仕事と収入を求めて首都へ流入することが多く見られるが，以上のようなことを背景に，サウジアラビアやオマーンでは，地方から首都への人口の移動は多くないのが現状である。

VI　むすびにかえて

以上のように，湾岸アラビア諸国での人口と人口構造について，そしてそれが石油経済の中でどのように変わっていったかについて検討してきた。GCC諸国を構成する湾岸アラビア諸国は，アラブ人から成る王政の諸国で，しかも産油国でもあり，一見すると多くの共通項を持った似た国に見える。しかし，人口の側面から見れば，例えばクウェートとサウジアラビアでは大きな相違があるように，実際の政治や経済については異なる点も多く，そうした各国の政治や経済を分析する際に人口構造の相違を押さえておくことは大きな意味を持っていよう。

人口構造とその変化について研究する際には，対象とする地域についての，いわゆる土地勘があることが不可欠である。筆者は，これまでの現地での調査活動を通し，サウジアラビアを除いた，その他の湾岸アラビア諸国については，僻地にある山村や漁村を含め，各国の国土のほとんどの地域を実際に訪れることができた。サウジアラビアについても，

近い将来に，各地方を訪ねることができないものかと切望しているところである。将来，サウジアラビアの地方社会を実地に見る機会が得られたならば，実地調査を踏まえ，都市と地方の問題について人口の側面から改めて検討してみたい。

（ふくだ　やすし/総合研究部中東総合研究プロジェク・チーム副主任調査研究員）

（注１）　Palgrave, William Gifford, *Personal Narrative of a Years Journey Through Central and Eastern Arabia (1862-63),* London, Darf Publishers, 1985, p.298.

（注２）　Slot, B. J., *The Origins of Kuwait,* Leiden, E.J.Brill, 1991, p.107.

（注３）　なお，バハレーンの人口についてCottrellの中では，1941年の統計では８万9970人でその内バハレーン人が７万4040人，外国人が１万5930人であったとされており，地誌に記された10万人という数字は若干多めに見積もっているように思われる。Cottrell, Alvin J. ed., *The Persian Gulf State,* Baltimore, The Johns Hopkins University Press, 1980, p.262.

（注４）　Lorimer, J.G., *Gazetteer of the Persian Gulf, 'Omān and Central Arabia,* vol.2, Calcutta, 1908, pp.238, 1074, 1412, 1437, 1532.

（注５）　Bowring, John, *Report on Egypt and Candia,* London (Parliamentary Papers), 1840, p. 4.

（注６）　中岡三益『アラブ近現代史』岩波書店，1991年，21ページ。

（注７）　バハレーンの人口については，Cottrellに基づき推定した。Cottrell, Alvin J. ed., *op. cit.,* p. 262.

（注８）　二つのグループの間の政治体制の相違については以下の文献の中で言及した。福田安志「王政とイスラーム主義」（山内昌之編『「イスラム原理主義」とは何か』岩波書店，1996年）。福田安志「ペルシャ湾」（立山良司編『中東』自由国民社，1994年）。福田安志「権力論」（山内昌之・大塚和夫編『イスラームを学ぶ人のために』，世界思想社1993年）。

（注９）　Lorimer, J.G., *op. cit.,* pp.410, 489, 1074.

（注10）　*ibid.,* p.238.

（注11）　*ibid.,* p.1593.

（注12）　日本国外務省外交史料館，外務省記録，File No.A-600-6-19『サウード王國及びヤマン王國（通称イエメン）事情』３ページ。

（注13）　Lorimer, J.G., *op. cit.,* pp.1185, 1200.なお，マスカトの人口については，夏と冬では異なり，夏場には暑さを避けて近郊のシーブやバルカなどに人口が流出し，冬場には人口が増え１万人になるとされる。

（注14）　UAE, *Annual Statistical Abstract, 1992.*

（注15）　El Mallakh, Ragaei, *Saudi Arabia,* London, Croom Helm, 1982, p.21.

（注16）　Cottrell, Alvin J. ed., *op. cit.,* p.254.

（注17）　*ibid.,* p.254,Lorimer, J.G., *op. cit.,* p.1593. および，サウジアラビア政府関係資料。

（注18）　Lorimer, J.G., *op. cit.,* pp.1185, 1200. Eickelman, Dale F., "Kings and People: Oman's State Consultative Council," *The Middle East Journal,* vol.38, No.1, 1984, p.61.およびオマーン政府統計資料など。